『韓山人詩集』について

要木純一

一、はじめに

どの国家、民族の文学史を繙いても、文学活動が絶頂に達する黄金時代の前後には、必ず暗黒時代と称される停滞期が附随し、各国、各民族の文化にとって寄与する所のない、無価値の時代であったと叙述されるのが通例である。

筆者は、年来このことについて、我々の歴史認識の構造自体に、絶頂期の光の部分に目を奪われるあまり、他の時期が一定以上の価値を有していても、その闇の部分を必要以上に強調せざるを得ないような方向性が存しているのではないかという疑念を抱いている。とはいえ、筆者にとっても、文学の歴史的記述は、やはりわかりやすく、論理の展開上便利であるので、結局は多くを歴史的記述にたよりつつ、そこから外れた部分をことさらに強調することによって、文学史的に見逃されがちな価値を発掘すべくつとめて来た。その「価値」というのがどのようなものであるか、未だ明確な定義を下すことができないのが現状であるが、ひとまず、「一読の価値」ということばに包摂されるような、要するに個別的で情緒的な観念を、広く模索していきたい。

二、「文学史」上の韓奕の時代

本稿で取りあげる『韓山人詩集』（以下『詩集』と略す）の著者、韓奕は、文学史的に忘れ去られた小詩人であり、それゆえに逆に筆者の如上の要請に能く応えてくれる部分が多い。

彼は、推定で西暦一三三四年から一四〇六年まで、すなわち元末から明初の生を享けた人であるが、『詩集』で見る限り、その詩作の年代は、多く、明に入ってからの、十四世紀末から十五世紀冒頭に属する。若い頃の作を廃棄した可能性もあろうが、質的にも晩年に近い作が優れるように思う。

この時期は、中国文学史上、非常に特異な暗黒時代であった。吉川幸次郎氏の『元明詩概説』（『中国詩人選集』二集　一九六三　岩波書店）によれば、文学史的には空虚の時代であった。以下の議論に関係するので、少し引用する。

「……十四世紀、元末明初の時期は近世における詩の一盛時である。……しかるに、十五世紀に入るとともに、すべては沈黙する。沈黙は、世紀の前半をおおい、文学のほとんどが、しばらく空虚となる。……明帝国の政治の体制は、いよいよ強固となりつつあったけれども、文学は全く振わない。天子側近の文臣としては、江西出身の楊士奇、福建出身の楊栄、湖北出身の楊溥が「三楊」と並称され、その詩文の体を、「台閣体」と呼ばれたというが、退屈きわまる詩のようであり、かわいそうな死をとげた解縉の全集とともに、かえりみる人はない。また前世紀にあれほど盛況を呈した南方の市民の詩も、盛況を中断される。詩は、市民の教養として、作りつづけられたようであるけれども、記憶され記録されるべき人物は皆無に近い」（第五章　十五世紀　明の中期の一空虚と復活　第一節　世紀前半の空虚）

その空虚の原因として、氏は二つあげる。一つは、

「素朴をもって国を立てた太祖皇帝朱元璋、及びその後継者の、政策の成功であるように思われる。……「八

股文」に習熟するだけで官吏となれるという簡易な「科挙」は、発案者の太祖の希望どおり、従来は官界にはいれなかった素朴な階層の人々を、官吏とし、あるいは知識人としての資格を賦与したと思われる。かくして擡頭した新しい階層は、一おうの知識人であっても、詩人として活動を充分にするだけの能力を、もつに至らなかったのではないか」

このことは韓奕にあてはまらない。この時期に韓奕はすでに六十歳以上であった。いま一つの原因は、

「また、南方の市民の詩の不振については、その中心である蘇州の地帯が、かつて、張士誠の居城であったことから、太祖の憎しみを買い、全国最高の税率を課せられたことも、その地方の人人の意気を沮喪させ、余裕をうばったであろう」

これは、まさにその蘇州に居住していた韓奕にあてはまる。なお私見を加えれば、この時期に、明初以来の知識人に対するしめ付け政策（処罰や強制移住）が効果をあらわし、かつ、靖難の変などの政治闘争下に、知識人が身を守るために汲々としていたであろうことも文学史的空虚の原因と考える。明朝の支配は、異民族王朝の元よりも苛酷であったらしい。

三、韓奕の生涯と後世の評価

韓奕の生涯の大概を以下に述べる。

錢謙益の編した、明代詩人の選集である『列朝詩集』の甲集第十六に、韓奕の詩が収められていて、その小伝が、彼の生涯をコンパクトにまとめ、従来の韓奕の人と為りに対する一般的な評価であると思われるので引用する。

「奕、字は公望、呉（蘇州）の人。元の文宗（在位一三二九～三二）の時に生まる。少きとき目眚（かす）む。筮して蒙卦を得、目眵療す可からざるを知り、遂に其の室に扁して『蒙斎』と曰う。意を仕進に絶ち、王賓と友善たり。偕に医に隠る。建文の初め、姚善呉に守たり。造（いた）りて之に請う。公望中門を踰えず、布簾の内に答えて「不在な

り」と云う。一日、賓の在るを伺い、其の室に掩入するも、公望は楞伽山に走ぐ。善随いて至れば、則ち小舟を浮べて太湖に入る。善は嘆息して曰く「韓先生は、所謂名は聞くを得可きも、身は得て見る可からざる也」寿蔵を支硎山の下に作り、賓之が記を為る。姚広孝其の詩に序して曰く「公望の人と為りは、端雅にして純正。書を読みて理を窮め、諸子百家は、博く究めざるは靡し。市廛に居りと雖も、岩壑に処るが如し」国初呉中の高士は、賓と公望とを以て首を称すと為す」

韓奕の詩に対する好意的な評価として、朱彝尊編の『明詩綜』もその韓奕の項に、朱の著した『静志居詩話』を引いて次の如くいう。

「明初の呉中に高士三人あり。一は長州の王賓、仲光。一は崑山の王履、安道。其の一は即ち公望（韓奕）也。三人皆医に隠る。仲光の詩は多く俚率。安道は、華山に遊んで詩を作ること一百五十首。然れども録するに足る者無し。必ず公望を以て巨擘と為す焉」

両書の記述を合わせれば、旧中国において、韓奕は、王賓らとともに、この時期を代表する民間の隠逸詩人として、ある程度高く評価されていたことがうかがわれる。同時期に、他に人材が殆んどなかったために、本来は小詩人の範疇に入るものが、ことさらに持ちあげられたという側面もあるだろうが。

両書に選ばれた韓奕の詩も、隠逸の風格をしのばせるものを中心としている。

例えば、両書ともに選ぶ「独坐」詩。

「世味は老来淡にして、門を閉じて独居を欣ぶ。一たび閑なれば僧も亦た羨み、癖多くして友は常に疎なり。竹露頭は梳けば冷たく、茶炉夢覚むるの初め。詩懐並びに酒興、楽しまずして復た何如」

しかし、筆者は、彼の別集を通読して、伝統的な意味での「隠逸」ということばでは、おさまりきらないあるものを感ぜざるを得ない。『列朝詩集』が選ぶ「二月二日友に寄す」。

「頻年芳節兩りながら匆匆、往事の閑思は半ば夢中なり。江郭春寒し連夕の雨、海棠花は信りす幾番の風。萋萋たる遠浦は芳草に迷い、歴歴たる青山は断鴻を没す。悵望して君を思えば無限の意、扁舟一酔するは故人同じな

らん」

この詩について、『中国文学大辞典』（一九九一　天津人民出版社）の韓奕の項目（尹恭弘氏）は、

「其の詩は清逸淡雅にして、能く較や好ろしく（地）其の閑適的の情懐を抒発す。《二月二日友に寄す》……の如きは、連夕雨、幾番風、萋萋芳草、青天断鴻的の景観は、其の〝閑思〟の情緒を将って生動地に烘托し出だし来たれり」

と評するが、いかがであろうか。まず「閑思」は、「往事」の、すなわち過去のものであったことに注意したい。現在、それは「匆匆」たる日常の中で「夢中」の如く失われてしまっているのである。雨も風も草も鴻も、ここではおよそ閑思にふさわしい景物とはいいがたいのではないか。第四句は、「二十四番花信風」の語をもとにしており、「海棠を今（春分あたり）さかせるところの花をもたらす風は、その二十四番の何番目にあたるだろうか（実は十六番目）」という語気であり、筆者は「閑思」よりも、友と別れて時間がむなしくすぎるさびしさを、この「幾番風」という表現が「烘托」していると感じる。「萋萋芳草」も「歴歴青天」も、崔顥の『黄鶴楼』詩の、一聯「晴川歴歴たり漢陽の樹、芳草萋萋たり鸚鵡洲」を意識しているならば、「閑思」とは程遠い憂愁に満ちた心情を読みとるのが自然なのではないか。尹氏の韓奕詩全体に対する「其の詩は、格局は大ならずと雖も尚お諷誦す可し」という評価については、筆者もおおむね賛成なのであるが、この詩の批評については首肯しかねるし、更に氏の下した「清逸淡雅」の評は、概説の記述としてはやむを得ないであろうが、そのような表向きの韓奕の詩の印象の裏に種々複雑で屈折した感情が隠されているだろうことを本稿では述べたい。

四、『韓山人詩集』のテキストについて

ここで底本について簡単に述べる。韓奕の別集『韓山人詩集』には、刊本が存在するようであるが、筆者が見るを得たのは、二種の抄本（刊本の抄本であろう）の影印、複写のみである。一つは『元人文集珍本叢刊』（一九八五

新文豊出版公司）巻八所収の『韓山人詩集』であり、今一つは、このたび静嘉堂文庫の御好意で複写するを得た『韓山人詩集』（四冊本）である。前者は冒頭に附されている潘柏澄氏の「叙録」によれば台北中央図書館蔵の旧抄本の影印である。潘氏は「珍秘と称するに堪う」と賞讃するが、今後者の静嘉堂文庫本と対照するに、前者は後者の後半二冊にあたる『韓山人詩続集』が缺けており、半数に近い詩詞が失われている。また、影印の不手際のためか、目次の順序が乱れ、附録の王賓著の「寿蔵記」の後半が缺けている。誤字、脱字も多く善本とはいい難い。

静嘉堂文庫本は、全体が四分冊から成り立っている。一冊ずつ、その内容の大概を示せば、

第一冊　韓山人詩集目録、四言古詩、五言古詩、七言古詩、五言律詩。

第二冊　五言律詩（承前、排律を含む）、七言律詩、五言絶句、六言絶句、七言絶句、附録　寿蔵記（王賓）、跋（梁用行）、又跋（守道）、又跋（蔣用文）。

第三冊　韓山人詩続集序（趙友同）、五言古詩、五言排律、五言律詩。

第四冊　五言律詩（承前）、七言律詩、五言絶句、七言絶句、韓山人詞、跋（復翁＝黄丕烈）、韓先生行状。

このテキストで、量的には、韓奕の作品の全貌をほぼうかがえると思われる。ただし、元人珍本文集叢刊本の目録の前に附されている、姚広孝著の「韓山人詩集序」は、彼にあって、此にないので、補う必要がある。

静嘉堂文庫本所載の、清の蔵書家　黄丕烈（復翁）の跋は次の如くである。（『清人書目題跋叢刊』六　中華書局一九九三所収の『蕘園蔵書題識十巻　附補遺』の巻九に同文がある）

「丁卯（一八〇七）秋莫、明初の刻本を以て、手づから校すること一過す。前に目録を脱し、後に「蒙斎記」を脱す。当に補入すべし。此の冊は、通体影鈔なる者に似たり。旧刻間ま、一二の誤字有るに、此も亦た之に仍る。隅ま爛板有り、字跡は模糊たるも、此は却って清爽なり、当に是れ初印本従り写する也。鈔本を以て之を忽せにする勿れ。復翁」

本文には、果たして黄氏の手と思われる校文が入っている。「明初刊本」なるものを目睹しえないので、信頼に足

る校定本であるかどうか確言は出来ないが、筆者が通読した限りでは大むね当を得ており、また、本稿の立論の上では支障がないので、底本としてこのテキストを使用する。なお、現時点では、黄氏のいう「蒙斎記」がいかなるものかつまびらかにし得ないのを遺憾とする。

このテキストの本文の書体は、端正であるが、癖のある異体字を多く用いている。恐らく原本（原刊本）においてもそのような字体であったと思われるが、本稿では通用の字体（常用漢字）に改めて引用した。

五、元末における韓奕

さて、以下は韓奕の生涯をたどりつつ、彼の文学者としての特徴を論じたい。

ただし、彼の生涯を知るための資料は至って乏しく、正確な年譜作成は期しがたい。特に、その前半生は、元末の混乱期にあって過ごされたのであるが、その間の事情をうかがわせる資料は殆んどなく、『詩集』中にもその時代のものと明言できる作品はない。そもそも『詩集』中の詩は、年号は殆んどないし、年代順に並んでもいないようである。それゆえ、例えば、『詩集』第二冊　七言絶句（以下『詩集』二　七絶のように略す）「重ねて同川を過ぐ」詩の一句「家を携えて曽て此に兵塵を避く」の「兵塵」が、元末のことか、明初のことか、靖難の変のことか（その可能性は少いが）、にわかには確定できない。このことは、史的な韓奕の像の再構築にとっては致命的であるかもしれないが、筆者の主な関心は、韓奕が、晩年永楽期の初めに到達した境地に在るので、その境地に反映する、彼の人生経験だけを拾えばよいことになる。更に、乱暴を承知でいえば、元末であろうが、明初であろうが、彼の詩作に与える影響が等値であれば、同じように扱ってもよいのではないだろうか。人生体験のイメージは、我々の脳裏に超時間的に現出するからである。

先に引用した潘氏の「叙録」には、考証抜きで、韓奕の生年を一三三四年（順帝の元統二年）にしている。今『詩集』一　五律「冬至」を見れば、その後序に「時に年は六十一。甲戌の歳也」とあり、「甲戌」は洪武二十七年（一

三九四）のことであるから、潘氏はこれに依ったと思われる。先の『列朝詩集』小伝及びそれが依ったと思われる王賓の「寿蔵記」（『詩集』二　附録）に「元文宗の時に生まる」というのに合わないが、今二、三年のちがいは問題でないのでひとまずおく。

『詩集』四　附録の「韓山人行状」によれば、彼は「宋の忠献魏王琦の後」、すなわち北宋の宰相韓琦の子孫である。その家柄に韓奕が自負をもち、家を保つことに使命感を抱いていたことを示す詩は、『詩集』にしばしばあらわれる。例えば、『詩集』一　五古「墓下子に示す」

「願わくは言に諸子の輩、恪守して怠荒する毋れ。家儀は伝わること昔自りす、歳事故常有り。它年呉下の墓、庶くは安陽に媿じざらんことを」

また、『詩集』四　七律「孫名？晬日に当りて戲作す」

「薄田郭を負うは先人の業、遺譜家に伝わるは旧相の門」

旧相はむろん韓琦を指す。

「韓山人行状」によれば、「父は凝、医に工みなり」とあるが、元末明初の学者で『元史』纂修にも加わった胡翰（一三〇七～八一）の別集『胡仲子集』（景印文淵閣四庫全集所収）巻九の「韓復陽墓碣」にあるとおり、字は復陽である。この文章は胡が韓奕の請いに応じて、その亡父韓凝（一三一八～七一）の為に撰したものである。元末における韓奕の動向を知る上で重要な資料なので、幾つかの部分を引く。

「君（韓凝）、諱は某（即ち凝）、字は復陽。少くして孤にして母を奉ず。孝を以て郷里に聞こゆ。郷人能く子たるを以て之を称す。力めて学びて古えを好む。尤も医家の説に精し。……淮陰の龔璛、遂昌の鄭玄祐は呉中に在りて、士林の望為り。独り行輩を折って、君と款洽たり。四方より来たる者、呉中の士を問うに、両人なる者は、君を以て首を称すと為す。是に於いて人は君の医に於けるや、蓋し寓なるを知る也」

医を業としつつも、元末の蘇州知識人の中心であった鄭元祐、龔璛に認められた人であった。そして、

「元の始めて乱るるや、張士誠は蘇州に拠る。衆の附かざるを恐れ、大いに人心を結び、士類を引きて己が用と

為す。或いは強いて君を起たしむ。君は固く母老いたるを以て辞す」

元末に蘇州を支配した、張士誠政権への協力を拒んだのである。

このような父の下で育って奕は人と為ったのであった。その処世の態度も受けついだであろう。

ただ、その処世の態度は、決して、張士誠は逆賊であるから、元に対して、或いは後には朱元璋に対して、節義を貫かんがために、出仕を固く拒んだというようなものではなかったと思う。その間の微妙さを示すために、『詩集』一　五古「鄭所南画蘭」を引こう。鄭所南は、鄭思肖、宋元間にあくまで元朝に抵抗した文人として有名である。その画いた蘭について詠んだ詩である。その後序にいう。

「……疎花蘭葉、根は土に著かず。人之に問えば、曰く、土は番人の為に奪わる、着くるに忍ばん邪」

等の鄭思肖の有名な故事を引いた後、鄭思肖の毅然たる態度を示す事件に言及する。

「嘉定の某官脅かすに它事を以てして、蘭を画くを求むるも、曰く、手は断つべくも、蘭は得可からざる也。又曰く、求むれば則ち得ず、求めざれば或いは与えん。老眼空濶なるも清風万古ならん」

これらの故事は、韓奕が父から聞かされ続けた話であった。

「奕之を先人復斎（凝）に聞く、復斎之を外祖唐東嶼に聞く。東嶼は所南と交わり甚だ厚し。皆宋末元初の人なり」

韓凝を先人と呼んでいるので、彼の死んだ明に入ってからの文章である。ここで、かくの如き言い伝えをする家族は、元朝統治下で反元の気風をもちつづけただろう、まして北宋の宰相の子孫なのだから、というふうに、安易に考えてはならない。彼等にとって、宋も元も張士誠政権も、そして明も同じように厄介な存在であって、就くも離れるも己が生にとって危険なものだったのである。鄭思肖についても、異民族王朝に反抗したことよりも、生を全うしたその処世態度に魅かれたのではないであろうか。「鄭所南画蘭」の詩に云う。

「（蘭の画は）流落して世の為に重んぜらる、寧ぞ論ぜん拙と工と。此の花は時有りて尽くるも、此の恨みは何の時にか終わらん。吁嗟匹夫の心も、受くる所は天衷由りす。我思う殷の頑民、千載将た同じきこと無きか」

鄭思肖の「頑民」たる生き方に共鳴するかの如きである。明王朝下でことさらに鄭思肖をほめたたえる裏に、漢民族王朝の明とても韓奕にとっては決して理想の王朝ではなく、少し距離をおいて、頑民、遺民として清潔に生きた方がよいという気迫があるのを筆者は感じる。このような処世態度こそ、韓奕が凝の下で元末に身につけたもので、後の隠逸的な彼の性格につながってゆくのであろう。

鄭思肖と逆に、宋の王族であるにもかかわらず元朝に仕えた趙孟頫について韓奕はどう見なしていたか。『詩集』一　五古「趙魏公の人馬の図、道上人の為に賦す」は、漢民族王朝の明にとっては評価するに都合の悪そうなこの人物の画を、徹頭徹尾ほめたたえる。そして、

「想う延祐の間に当りて、正に太平の日に逢う。万里烽烟は息み、八荒轍跡は無し」

という部分は、元仁宗の治世の平和であったのに比べ、明の現状が混乱して、戦乱にあけくれるのを暗に批判するが如くである。

韓奕が死んだ後、その弟韓夷が、兄の五絶「支硎山十二詠」に画を附して、序を「三楊」の一人楊栄に請うた。（景印文淵閣四庫全書本『文敏集』巻十四「支硎山十二詠序」）その序に韓奕が明に入って出仕しなかったことについて忖度する。

「世の人蓋し先生（韓奕）の高志を知らざる者有りて隠者を以て之を目す。先生豈に真に隠ならん哉。元の末に当りて、張士誠窃みて姑蘇に拠る。先生父子（すなわち韓凝と奕）は、毅然として徴辟を受けず。情を山水の間に放ちて、優遊自適す。天朝天下を統一するに迨んで、凡そ四方才俊の士彙りて征む。時に於いて方に将に有為を見さんとす。而るに目眚むを以て遂に以て自ら效すを得ず。先生の志は、豈に深く惜しむ可からざらん哉」

その毅然たる態度を賞讃するのはよしとして、韓奕が眼病さえなかったら明朝に仕えて力を発揮したかったのだろうと考えるのはどうだろうか。たしかに、『詩集』四　七律「雨中戯作」に

「旧業幸いに遺譜を存して在り、宦情老来が為に無くんばあらず」

というのは、老いて家が安定してもなお役人になりたい卑しむべき気持があることを自嘲するかの如くであり、他

の幾つかの詩にもそう読めそうでないこともないものがある。しかし、筆者は、中国の知識人は誰しも出仕の希望をもつのであって、韓奕はそれがかなり少くなるように成長したのだと位置づけたい。楊栄の言葉は実情にそぐわないと思う。

六、韓奕と医学、神仙術

再び胡翰の「韓復陽墓碣」にもどる。医を業とした韓凝の医学に対する見方は、どのようなものであったか。

「嘗て医を論じて以為えらく、医の術為るや、儒者の学と与に、皆古えの聖人より出づ。而して後世精工にして皆庸妄、聖人を去ること遠きこと甚し。庸妄を以て聖人の事を業とし、又其の書を習わず、又儒に資らず。宜べなり、其の之を失する者の多きこと矣。吾の賢豪の士を求むる所以は、意うに必ず隠るる者有ればなり焉」

政策的には元朝に於いて儒者は抑えられていたかも知れないが、江南の知識人の意識では、伝統に従って、儒は最高位に、医は最下層に位置づけられていた。そのような中で、医学を学ぶことは、聖人の道をきわめんとする点、儒学に遜色ないことを宣言し、したがって医者たるもの刻苦勉励すべきことを説く。その父によって、奕も医学の探究を厳命される。

「君（凝）は烏傷（義烏）の朱彦脩の著わす所の『格致論』の、本を『黄帝』、『霊枢』、『素問』に推して、以て説を為すを得るに及んで、犁然として心に当たる。時に彦脩没して已に数載、君乃ち奕に命じて、其の門人従り尽く其の術を受けしむ……」

朱彦脩、名は震亨（一二八一～一三五八）、元末に活躍した医者である。

無官の文人が、医業を生計の資とすることは陸游等史上数多見られるが、若い時から医学に精進し、医業を本業に位置づける文人はかなりめずらしいのではないか。

『詩集』にも、彼の医学への熱情が見うけられる詩が間ま存在する。例えば、『詩集』三　五律「次韻医家十六詠」。

その第一首、題して「処方」、

「数品剤を成さんと擬し、千金珍を比さんと欲す。遠くは炎后氏を宗とし、近くは漢朝の臣を法とす。必ず中るは思いを精にすること徧く、奇を全うするは意を出だすこと新たなり。此の妙に臻るに由無ければ、空しく念じて極めて民を疲れしむ」

古来からの伝統に基きつつ、慎重に創意工夫を試みる。それこそが民を救う道なのである。かかる精神論から、第三首「蒸朮」、第四首「培橘」など具体的な作業に及ぶまで、詩に詠み続ける。また第十三首「著書」詩には、

「自ら探る蘭室の秘、親しく薬窓の偏なるに向う。術に在りては奇奥多く、文に非ざれば遠く伝わること無し薬は諸品の悞れるを糾し、工は衆科の全きを正す。深奥なり軒岐の語、須らく知るべし天自り出づると」

先賢の書によりつつ、実地の処方を正すべきことをいう。研究熱心な態度と医学に対する使命感があらわである。以上のように医学を考究すれば、更には不老長寿の仙人となる薬を作ることが出来る。すなわち第十四首「煉丹」、

「一鑪惟だ自ら守る、九転候つこと何ぞ長き。安んぞ浮沈の体を識らん、仍お沐浴の方を諳んず。祥光時に発して艶に、熟気暗に香を生ず。海上に方士を求めず、千年漢王を笑う」

このように、医術は神仙道につながるのであるが、どちらもおのれ一人の命を守るにとどまらず広く人を救うべきであることを、末尾の第十六首「通仙」では述べる。

「医道は仙道に通ず、両家は一川の如し。由来兼ねて物を済う、独り自ら年を長うするのみにあらず。虚迹は閑歩に随い、諸方は秘伝を献ず。曽て聞く丹鼎熟すれば、鶏犬も亦た天に昇ると」

これらの詩のみから見れば、韓奕は医を通じて世を救い、自らも仙人になることを志す信念を持つ人であるがごとく感ぜられるが、中国知識人の常として神秘主義にのめりこむことはできず、神仙にあこがれを抱きつつも、自らにその資格がないことに諦念する。

『詩集』一　五古「丹訣の後に書す」に、その間の事情が明らかである。その序、

「李斯庵先生（詳細不明）は既に奕に口授するに丹訣を以てし、復た手づから、古仙人丹訣を書いて以て奕に付

す」

この後に、李斯庵の丹訣を引き、次の如くしめくくる。

「奕は本下愚にして、濁世に生まる。顧だ乃ち妄りに斯の事を慕う。嘗て粗ぼ其の説を得たりと雖も、自ら必ず其の人に非ざるを分とし、徒らに高晨清夜に於いて、古仙人を埃壒の表に翹首す。其の詩を詠歌して、以て夫の景仰の懐いを寓す。世外には無窮の楽しみ有り。世内には無窮の悲しみ有り。其の意は言うに勝う可けん耶。因りて五言一首を賦す」

この長い序のあとに「弱冠丹術を慕い、妄りに仙は期す可しと謂う」で始まる五言古詩が始まる。若い時には、医学、仙術を熱情的に探究したのであるが、やがてそれがおのれの分でないことに気付き、むなしく日を過ごすというのである。『詩集』二　七律「秋懐次韻」にいう。

「細かく思えば只だ神仙の好き有るのみなるも、何れの処にか還丹は求むを得可けん」

また、『詩集』四　七絶「次韻して学庵舅に答う」第二首、

「還丹は訣あるも終いに就し難し」

は、まさに李斯庵の「丹訣」を実行に移せぬ己を嘆く気持であろう。

彼の詩には、時に、世を救うことなどかまったことではない、ただ自分さえよければよいという感情が率直に詠われている。『詩集』一　五古「蒼朮を採る」。めずらしい薬草の蒼朮について、その採集方法や取扱い上の注意を細かに論じた後に突然のごとくにいう、

「人を済うは余豈に敢えてせんや、聊か以て餘生を養わん」

韓奕にはかくのごとき暗い面があるが、それは医者でありながら自らの眼病を克服できなかったことによるのかも知れない。

ただ、我々は、彼の自嘲の句にのみかかずらわって、彼がかく挫折感を味わいながらも、なお医学によって己をすくい人をすくおうとする、明るい面を持ち続けたであろうことを否定してはならない。『詩集』二　七律「種杏軒、

児の為に医するの賦四首」の最後の一首にいう。

「花開き果熟し自ら年年、林下に深居して日び晏然たり。道う莫れ陰功顕報無しと、小児の頭上に青天有り」

篤志の医者をほめるために作った詩であろうが、作者の理想につながるであろう。むくいはなくとも、救った子供達が元気に遊ぶ姿が見られればそれでよいのである。韓奕が単なるエゴイスティックな隠逸詩人でなかったことがこれで知れよう。

七、家長としての韓奕

医学及び神仙道に対する、韓奕の態度は、上の如く一応の安定を見たであろうが、その日常生活は、およそ「医に隠れた」詩人にしてはふさわしくない、不安に満ちたものであったろうことを以下に述べる。

張士誠の乱において、出仕を断って身を保った経験を生かして、韓奕が隠者として身を全うしたであろうことは既に述べた。それはそれで、安易な道ではなく、過大な緊張を強いられたであろう。ことは彼一人の身にかかわるのみではなかった。危険を承知でおのれ一人清く生きようと思っても、家族や周囲をまき込むおそれが、特に洪武建文の治世にはあったようである。彼の家族に対する愛情と責任感は非常に深い。真面目な性格の彼は、隠者として全てを放棄する気にはなれず、為に蘇州城内に住み続けたものと思われる。

韓奕には、韓琦以来の名家を、家長として守るべき義務、或いは使命感があった。父凝の生前、次に引く如く、やや異常な形で、長子としての任務を託された。『国朝献徴録』巻七十八　「太医院判韓凝伝」（無名氏、恐らくは「太医院判韓夷及其父凝伝」とでもあるべき内容である）

「（凝）子は二り、奕、夷。……夷は字伯翼、少くして母を失う。凝は奕に命じて之を育てて後と為らしむ。因りて詒孫と名づく」

父の厳命で、年の離れた異母弟の夷（もとの名は詒孫）を養子として育てることになったのである。この弟は、

後に従兄の奭とともに、永楽期にとりたてられて太医院に出仕する。

「洪武中、郡の医学正科と為る。永楽二年従兄の太医院使奭は上に言いて、召して御医を授けしむ。改めて夷と名づけ、公達と字す。第を致和街に賜う。継いで院判に升る。奕卒す。陳情して賜假を得たり。帰葬す。仍お葬費を給す」

いろいろな利害関係や打算もあったかも知れないが『詩集』で見る限り、奕はしばしば夷に詩を送って深い肉親の情を示している。例えば『詩集』一　五律「夷に寄す」、

「一たび定省を辞して従り、両載京華に仕う。是(いた)る処に帰路有るに、何れの時にか暫らく家に至らん。長江空しく去雁、落日又飛花。山色西北に連なり、時時望眼賒かなり」

南京に出仕した弟をはるかに案ずること切である。

『詩集』四　七絶「詒京に入る。途中雪に遇う。憶うこと有り」。「詒」は夷に改名する前の名である。したがって、南京にこれから出仕しに上る夷を気づかう詩であろう。

「汝の身の行く処は我が心随う、坐して行程を数えて到らん時を計る。三日孤舟京口の雪、薪を買いては何れの処にか朝炊に就かん」

弟は今頃南京へついただろうか、雪に凍えていないだろうか、出仕の成功をいのりつつ韓奕は心配するのである。

韓奕の死後、夷の奔走によって『詩集』がまとめられ、姚広孝の序を冠することが出来、また先述したように楊栄に「支硎山十二詠」に序を書いてもらえたのも、皆韓奕の恩愛の深さに、夷がこたえようとした結果であろう。

実子に対する愛情も深い。『詩集』二　七絶「児子の書を得たり」。

「家に還らんと信有るも久しく期を過ぎたり、平安なりと料り得るも也(ま)た自ら疑う。少き従り曽て遠く去ら教めざれば、門に倚りて怕れて日斜めなる時に到る」

不安な世情において、遠遊する子に対する心配は大きかったであろう。

長年つれそった妻への愛情を詠った詞もある。『詩集』四　詞「千葉芝　内に寿す」、

「炉烟は拂拂、生だ願う同室に長ぜんと。還お新腔を度して旧瑟を調す。四十三年今日。当初黄巻に相い逢い、後来紅線に相い従う。此れ自り白頭まで相い守らん、榴花に無限の薫風」

また「斉天楽」詞（寿内）も、夫婦無事に過ごしたことを祝う作品である。

八、韓奕の処世

このように一家眷族を背負っている以上、純粋な隠遁者となるのは無理である。それどころか、明初の恐怖政治下においては、ある程度政治的に動いて身を守ることは必須であった。かつて張士誠の拠った蘇州は太祖の過激な弾圧を受けた。知識人のあるものは処刑され（高啓など）、あるものは強制移住させられた。（顧瑛など）。『詩集』でしばしば蘇州を目して「空城」の語を用いるのも（例えば『詩集』二　七律「秋懐次韻」、「風は空城より起こりて塵は漠漠、日は荒苑に斜めにして水は悠悠」）その弾圧後の実際の光景をいうとともに、住民の精神的荒廃を暗示するかのようである。残された文才ある知識人は、王賓や韓奕だけであり、彼等がかげで蘇州の知識人界をリードしなくてはたちいかなくなったのである。『詩集』をくれば、中央政府の大官との交際こそ少ないが、地方官（吏）との詩のやりとりは多い。

『詩集』一　五古「郡侯の張公雨晴禱に応ず」では、張知事が善政を布いたおかげで、天も感じて雨調風順となったことをことほぐ。

「惟れ侯は茲の邦に涖み、民に於いて大いに志有り。動に天を以て心と為す、豈に但だ徳愷悌なるのみならんや」

『詩集』二の守道跋に「世よ城市に居るも、嘗て一も官府に至らず」と、韓奕について述べるが、役所に行かなくとも、知識人はさまざまな方法でさまざまな影響力を行使できたであろう。数十年後、無官のまま蘇州の地方政治を牛耳った沈周、唐寅、祝允明らの先達であるといえる。

かく考えると、蘇州知府の姚善との面会を固く拒んだという、韓奕の代表的なエピソードもうさん臭くなる。姚

善は、『明史』巻一百四十二の伝によれば、

「（洪武）三十年蘇州知府に遷る。初め、太祖は呉の俗奢僭なるを以て、重く繩すに法を以てせんと欲す。黠者は更に短長を持して相い攻訐す。善は政を為すに大体を持し、苛細を為さず。訟は遂に衰息す。呉中大いに治まる。好んで節を折って士に下る。隠士の王賓、韓奕、兪貞木、銭芹の輩に敬礼す。……時に燕兵已に南下す。密かに鎮、常、嘉、松の四守を結びて、民兵を練りて備えを為す。芹を朝に薦む。行軍断事に署す。善は尋いで京師に至る。……建文四年詔りして、蘇、松、常、鎮、嘉興五府の兵を兼ねて勤王せしむ。兵未だ集まらざるに燕王已に京師に入る。……屈せずして死す」

というような、蘇州に善政をもたらした、忠君愛国の人であった。『詩集』一　五古「安分軒」に次の如き記述がある。

「政化日に既に弛み、衆情日に滋す競う。何に由りてか兵訟息み、家国永えに嘉靖せん」

これが「黠者は更に短長を持して相い攻訐する」ような、蘇州の世情を憂えた句だとするならば、「訟は遂に衰息する」ように導いた姚善を疎んじるいわれはない。積極的にコミットしなくとも没交渉のままとは思えない。

永楽帝の治世に編まれた『詩集』にもとよりその痕跡はないが、この間の韓奕の身の処し方にはあいまいなものがありそうである。

靖難の変が終わり、永楽期になると、自らはもはや老齢で病気がちなので隠居生活を続けるが、弟の夷や従弟の奕が、中央政府に出仕をはじめる。この出仕が奕の古くからの知友で永楽帝のブレーンとなった姚広孝の力による所が大きかったであろうことは想像に難くない。『詩集』では、例えば一　七古「道上人に寄す」の「永楽改元徳化新たなり」の如く永楽帝の治世をことほぐ言葉が散見する。建文期の暗鬱が晴れた喜びもあろうが、家族が出仕できた喜びもあったであろう。いづれにせよ、「隠逸詩人」にはふさわしい表現とはいえない。

姚善との関係についてはやや武断に傾いたかも知れないが、彼が政治的利害とは無縁に生きることが出来なかったことを強調したかった。『詩集』の表向きの隠逸的な風気の裏にはある種のいかがわしさがただよう。しかし、筆

者の目的は、韓奕の隠逸詩人としての偶像をおとしめるに在るのではなく、むしろ、そのように政治と関わりをもたなくては生きていけない状況下で、それでも、何とか清潔な隠逸の境地を保とうとした彼の意志を評価したいのである。

なおつけ加えれば、このように大官との交わりを示す詩は『詩集』の中ではやはりまれで、多くの詩は群小の知識人達にささげられている。小官吏（『詩集』一　五律「陳監税に送る」）、学生（『詩集』一　五律「府学生員を送る」）、教官（『詩集』一　五律「県学教諭を送る」）、恐らくは罪を得て遠流される者（『詩集』一　五律「人の北に戍するを送る」　二首）、食いつめて塾の教師になるもの（『詩集』二　七律「湯時中の塾師に赴くを送る」）など、弱い立場の人々に同情を寄せる。そこに我々は韓奕の知識人のリーダーとしての自覚を読み取ることが出来よう。

九、韓奕と仏教

世界は混乱し、自らも雑事に心乱されねばやまないこの濁世において、韓奕は死ぬまでいかに生きるべきかを模索していたと思う。『詩集』二　「生日次韻」にいう。詩中にいうように五十七歳の時の作である。

「満頭の白髪は烏巾に裹まれ、我に三年を仮せば是れ六旬。何れの処にか山林は将に老い使めんとす、余生は天地人を帰しめんと欲す。還丹は自ら信ず仙骨無きを、大患は都て縁る幻身有るに。懽思未だ成らざるに哀思集まる、春風満眼蓼莪新たなり」

「仙骨の無い」ことはとっくにわかっている。神仙道で救われる期待はない。そこで「大患は幻身有るに縁る」という諦観が生じるのである。かくして、彼の興味が仏教に向うのは自然のなりゆきであった。方外の交わりを詠む詩は、「詩集」の多くの部分を占める。しかし、筆者はこれらに重きをおかない。そこには深遠なる思索はなく、仏教にまつわるムードを楽しむ態度が濃厚で、僧侶との交わりもそのムードを背景とした詩作の応酬を楽しむかの如くである。『詩集』四　詞「踏莎行　秋夕山方の寺に宿す」の後半を引く。

「杳杳たる松蘿、冷冷たる鐘鼓。上方は更に雲深き処に在り。鬢糸禅榻今宵に話す、師従り無生の句を了せんと欲す」

哲理などは述べない。寺に泊って、和尚との話を楽しむという外観のみを詠んでいる。「無生」の語を韓奕は好んで用いる（例えば『詩集』三　五律「春遊」）が、これも仏教の真理というような仰々しいものではない。実は奕が尊敬した王維が愛用した語（例えば「弁覚寺に登る」詩）で、王維にならって詩の仏教的ムードをもりあげようとしたにすぎない。

そして、仏教界も政治の影響の及ばぬ聖地ではない。『詩集』巻二　七律「僧の僧司に赴き、試巻を謄録するを送る」に

「聖恩は元仏恩と同じ、詔りして諸僧を試みて古風を振わす」

僧に対する科挙のようなことを行って国家の統制を強めようとする。（僧録司の設置は一三八二年）韓奕は、うわべはそのことを讃えるようでありながら、

「文字を官に送りて録上を煩わす、切に須べからく検点すべし功を論ずる莫れ」

まちがいのないようにせよ、いいめにあいたいと思うな、と結ぶのは、何か裏に不同意を含んでいるような語気である。

十、韓奕晩年の詩境

仏教で一時的な清浄感を味わえても、結局は救われない。かといって世俗の圧力は常に身近に迫ってくる。『詩集』一　五律「仲夏」にいう。

「住みて城府に在りと雖も、一生林下の人。長き斎は笋蕨に甘んじ、少く出づるは衣巾に嬾なればなり。雨気重幕に入り、樹陰は四隣に分かつ。来客の語るを聞くを怕る、田野飢民有りと」

おのれの生存というよりも、精神の安定を犯そうとする、飢饉のニュースが耳に入ってくるのをひたすら恐れている。晩年体が衰弱し、外出しなくなってからは、殊に人事によって、心が動かされるのを警戒するようになる。人との交わりは、失望に終わることが多くて、彼の心を傷つけがちである。『詩集』一　五律「秋晩」、

「世道は消長多く、交情は是非半ばす。白頭は俗底に流れ、転た覚ゆ寸心違えるを」

また『詩集』三　五律「雑言」、

「窮り無きは惟れ世事、定め難きは是れ人心」

しかし、それでも人事を愛好するような側面が彼にはあった。先の「仲夏」の詩に「住みて城府に在り」というように、人の集中する繁華な地を離れたくない、所謂「隠逸の士」にかわしくない志向も持ち合わせていた。老年に至るまで政治に彼なりのし方で関わってきたであろうことは先に述べた。家族を守ることは、負担が大きかったであろうが、生きがいでもあった。清浄を求める一方で、人事を嫌うとは限らなかった。これら相い矛盾する志向を否定することなく、互いにバランスをとろうとすることが、晩年の韓奕の課題であったように思う。

彼は「解后（邂逅）」ということばを多用する。『詩集』二　五律「晩歩」、

「客愁散歩せんと思い、疾いに力めて亭堂より下る。水暖かにして魚の楽しみを知り、林幽かにして蕙の香を識る。風無くして花の信は少く、雨ふらずして菜畦は荒る。解后す西隣の叟、閑談して夕陽に至る」

孤独を好む一方で人恋しい。かといって、計算ずくや結果を求めて、人と関わるのは不愉快である。そんな彼にとって、偶然による出会い、意識を超えたところからひょっくりとむこうからやって来る「解后」こそが望ましい。

人事はもちろん、医学（神仙道）、仏教も彼を救わない。かといってそれらを全て捨てて絶対孤独の境地を目指しているわけではない。さまざまな志向が混然と一体化したような微妙な感情の複合体、それを彼は詩に載すべく晩年努力し続けたのではないか。もとより救いはない。『詩集』三　五律「次韻して王之常に答う」、

「家貧しきは世難に由り、身病むは是れ詩魔」

何の役にも立たないのに、詩作に魅せられることをくり返しくり返し彼はいう。老年になってようやく至ったか

かる微妙な心境を、詩作によって、後世に伝えることこそ彼の生きがいとなったろう。

『詩集』四　詞「生査子　夏日」。『詩集』最後の作品である。恋する女性をうたうようであるが、結局は自分の心境をいいたかったのだろう。

「虚牖桐花落ち、疎泊荷気通ず。独自閑庭を遶る。往来還去せず。履の滑べるは旧苔滋るなり、衣の潤うは残香膩たるなり。一個の人も来たる没し、心中の事を細説せんに」

「没一個人来、細説心中事」。自分の気持を伝えるべき人がいないさびしさを詠うように表向きは見える句であるが、それだけでは韓奕の微妙な感情がわかったことにはならない。心中の事を人に伝えたいという気持はもちつづけながら、一方でそれを抑えて誰にもいわずに、すなわち誰にもじゃまされずに、じっと今の心境を味わう。そして、重要なことは、その心境と経緯を美しい詩詞の形にして、最後には人に伝え、後世に伝えることなのである。

十一、おわりに

隠逸思想にせよ、隠逸詩にせよ、何百年間繰り返し繰り返し生産され続けたものである。思想史的文学史的には、最初の発生のみが大切で、継続する後のものの多くについては、独創性のない模倣としてかたづけられてしまう。しかし模倣のように見えても、その一句、一言、一行動の裏にはそれまでのさまざまの人生体験の複合が隠されているのである。作者の人生の厚みを意識しつつ作品を読めば、文学史的な観点から見逃されがちな「価値」が確かに存在しているように筆者は思うのである。